河川整備計画の策定に当たって

当計画は、今後２０～３０年先の河川の整備計画を作るもので、非常に重要な計画であると考えています。

その計画策定を、各界の専門家や地域の河川に詳しい人で議論し、河川管理者もオープンな議論を期待し、この議論を受けて計画を策定するといった画期的なものと考えています。

一方、地域住民との共同・共創、自治体との連携といった視点が薄く、これを解消して理解者を増やし実効ある計画することにより、河川整備計画でなく河川創造計画とする必要があると考えます。

１．　３要素の関係について

人間は、大昔に氾濫域に水・米（狩猟→稲作）を求め社会生活を営んできました。そして、洪水の危険に対して堤防を築き利水と安全を確保した訳で、まず、治水・利水の重要性を認識して堤防・ダムを位置づけるべきと考えます。自然に流下する水が常にあることは誰もが望むことですが、急峻な地形から水を貯めなければ利水と治水が保てないなら、目指すべき適切な計画水準を明らかにし、適正な費用と時間をかけて着実に計画を実施すべきと考えます。

衣食足りて礼節を知るように、生命の糧と安全が確保できて、初めて環境といった利用を考えことが自然であると思います。

２．なぜ、河川環境の整備が必要か

第１次産業を主体とした自給自足時代などは、人間生活が河川と深い関係にありましたが、第２・３次産業へと産業が高度化し、都市への集積によるメリットが追及され、経済成長を達成しました。

しかし、過度の集中が産業だけでなく人間生活へのデメリットを生み、河川環境に対しても開発･利用に偏したデメリットが発生したと考えます。

生態系は生物にとって多様な環境が良いことと言われておりますが、人間にとってもよいものであり、その認識の共有が必要であると考えます。

河川整備計画策定に当たっては、川側から見た視点と、地域から見た視点を検証したとしていますが、地域から見た視点である人間生活としての捉まえかたが薄いような気がします。

その点をデータで検証し、河川と地域住民の生活が双方における環境形成の場であることを認識する必要があると考えます。

（検証例）

・温暖化やヒートアイランド、風を通す自然の換気扇としてなど、河川が有り無しでどのような違いがあるのか

（川を埋めて後悔した事例は多い）

３．河川環境の整備は何を・どの水準を目指すべきか

河川環境整備において超然的に、昔の河川はこうだったとか川の環境はこうあるべきだといった考えが主となる議論がなされ、偏向的視点となっている感がします。この点について、川を堤防といった人工構造物で閉じ込めた時点から、川と後背地の人間生活を遠いものに分け隔てたのですが、これを相互に関係するものとして近づけて共有の場とする必要があります。そういった点からの、検証や視点が必要と考えます。

（検証例）

・生き物にとって多様性がよいとするなら、都市の人間生活に必要な都市公園と河川を比べて、その整備率はどの水準にあり、動植物の数の差はどれくらいか。それによって河川の果たす環境の役割が見えてくる

・人間が心身ともに健康といった場合に都市的施設で不足する要求は何か。休息やリフレッシュがどれだけ大切で意義があるか科学的に検証し、河川がスポーツや散策の場としていかにあるべきかの見方もでてくる

４．自治体や住民との連携

土地利用誘導において自治体と連携するとしていますが、自治体は自治地域全域に住む住民のことを考えて自治やまちづくりを実施しており、土地利用誘導のみで河川と関わるのでなく住民の生活全般にわたって河川との関わりがどうなるかを考えていく必要があります。

従いまして、地域住民の生活やライフサイクルを、歴史・生活･文化・安全・産業･経済等の幅広い分野において検証し広く地域住民に周知・議論し、自治体と調整して頂き実効ある計画とされることが肝要と考えます。

又、みんなの河川としてグランドーワーク的に地域団体や住民を巻き込むことがよく、そのための措置も必要と考えます。

５．整備計画から創造計画策定の視点

川のことをよく知っている専門家や関係者が委員となっての議論では、検討を河川主体に実施しがちですが、これでは多くの人に広がってかない心配があります。

地域生活者からの３次元空間的視点に自分と時代の時間的視点としてのライフサイクルや世代を加えた４次元的視点で河川とどのように関係することがよいことなのかを議論し理解されて、初めて「河川に関係するものが策定する河川整備計画」から「世代を超えた地域全体の協同・共創の河川創造計画」が可能になるものと考えますので、十分な対応をお願いします。